
宵の蜜月

波川瑠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宵の蜜月

【Nコード】

N0073K

【作者名】

波川瑠璃

【あらすじ】

3世紀あたりのササン朝ペルシア（現在のイラン高原あたり）を舞台にした恋愛&冒険ものです。

龍涎香りゅうぜんこうがたおやかに香る。王の最も愛する香り。侍従や仕官は色鮮やかなペルシアの長袖服を着、侍女や女官は飾り玉の付いた垂衣を掛け、婚礼の間に集う。ペルシアの豎琴、モスルの平鼓タンバリン。大理石の広間に響く楽師たちの音色に導かれて、王と花嫁は中央の高座へと向かう。

黒髪に切れ長の瞳を持つペルシア人の中でただ一人、白い彫像のような顔立ちの花嫁は、金の髪を真珠のような絹の垂衣で覆い、目を伏せていた。王と花嫁の玉座に最も近い、最前列の参列席がひとつ空いている。ペルシア王宮軍隊長の席。花嫁が愛し、花嫁を愛した人の席は、未だ主人を待ち続けていた。

「おい、アミル。キールスはどうした」

同じ年ほどの、まだ幼さの残る大神官が後ろから耳打ちする。王宮軍の少年兵アミルは、すっかり忘れていた、というフリをする。

「王が気になさっている。お前なら居場所が分かるだろう？」

アミルはしぶしぶ席を立った。郭に座して酒瓶を開け、金銀の杯を酌み交わす人々の間を縫い、広間を出る。その様子を――――一ももちろんなんのために、と気づいていたのだろうか――――老齡の王はずっと目で追っていた。

キールス――――王宮軍隊長は、司令部庁舎の司令官室にいるに違いなかった。そこは彼の私室のようなものだ。宮殿の敷地内にある庁舎は、人の足で十分とかからない。

花嫁衣裳のクロエは、一段と美しかった。隊長が愛した、ギリシアの囚人。

彼女にとって、どっちが幸せなのだろう。極刑を免れ、王に嫁いで行く運命と、心から愛し合える一人の男を失うのと。

「キールス隊長」

アミルは司令官室を覗き込む。キールスはけだるそうに腕を組ん

でいた。兄のように慕う、五つ年上の、若き司令官。

上質なペルシアの長袖服に真新しい繻子の帯。服装だけなら参列者と変わらない。

「……どうしますか？一応、僕はお迎えに来たわけですが」

「ああ、もう始まっているか。そうか、時間だもんな」

立ち上がって、背伸びをする。

「王には来るように言われ、クロエには来るな、と言われ。……考え込んでたところだ」

「……クロエに、会ったんですか」

「ああ」

キールスは、あ、と慌てて口を塞ぐ。一週間前まで、彼は司令部庁舎裏の牢の中に軟禁されていたし、クロエは宮殿の一番豪華な奥の部屋————後宮にずっといたはずだ。後宮には侍女と王以外出入りできないのに、一体いつ、どうやって会ったのだろう。

「隊長……クロエはずっとうつむいていました。こんな状態のまま……」

そこまで言って、口をつぐんだ。————婚儀を挙げてしまつて、いいのですか？

「どうすることもできない。俺の無力さに比べ、王はご寛容だ。私の過ちも、彼女の過ちもお受けになって下さったのだ」

彼女もそのうち、王の深い御心に感謝するようになるだろう、とキールスは続けた。独り言のような、自分に言い聞かせているような声だった。

一ヶ月ほど前、ギリシア人居住区のキリスト教徒を取り締まるよう勅令が下された。戦争捕虜の子孫である彼らはペルシアに暮らしながら、祖先の文化を頑なに守っている。ササン朝では、国の神————火の神に免じて彼らに生活の自由を与えているが、ペルシア人に布教を行うことは許されない。国教である拝火教は、ササン朝の政治思想そのものなのだ。

王宮軍は紺碧の生地に金の刺繍が入った軍服を着て、次々と軍馬に跨る。隊列は馬の鼻先をギリシア人居住区に向けた。

ギリシアの町並みと切り取ったような居住区の住人たちは、突然現れた王宮軍に眉を潜める。兵士たちは馬から降りると四方に散り、教会や集会場に踏み込んで、神殿の神々と同じ顔をしたギリシア人たちにいくつも質問を浴びせかけ、数人のキリスト教活動家を捕らえた。

この後、彼らを尋問に掛け、布教の実態や内容を把握し、王に報告することが軍の任務だった。しかし、ギリシア人居住区から司令部に戻った翌日、一番初めに尋問を受けたのはアミルだった。

「お前には世話を掛けっぱなしだな」

キールスは隣を歩くアミルに言う。司令官室を出て回廊を渡り、宮殿の婚礼の間へと向かう。花嫁への想いを絶つために。

「僕は好きですから。隊長も、クロエのことも。頑固で無謀なところが、特に」

「……少し黙っててくれないか」

キールスは苦笑いと浮かべるとアミルの背中を叩いた。ばふつと音がした。

尋問は朝から行われた。口を開けた獅子の石像が構える、司令部庁舎の裏。日干し煉瓦の粗末な留置所の一角にある尋問室に通されると、薄くて硬い絨毯の上に座らされた。

「いいか、アミル」

キールスより十歳年上の寡黙な副隊長が、低い声を潜めて言う。

「まず、ここで聞かれたこと、話したことを口外にするな。いいな」「はい」

何のことだか分からないまま、返事をした。

「キールスのことで聞きたい。部下としてでも、友人としてでも答えるがいい。彼は以前からギリシア人居住区に出入りしたり、ギリ

シア人と個人的に親しくしていたか」

「いえ、僕は知りません。個人的に、とは？」

「個人的に……例えば、女性だ」

「そんな」

アミルは一瞬言葉を詰まらせた。

「隊長は婚約者がいるではないですか」

副隊長は後ろに控えていた兵士に顎で合図を送った。兵士は尋問室を出ると、後ろ手に縛られた隊長を引き連れて戻ってきた。

「これは……どういう意味ですか」

「こつちが聞きたいものだ。どうにもこうにも口を割らん。昨日、連れ帰ったばかりのキリスト教徒を、夜のうちに一人逃しやがった。キールスが自分の手で、だ」

「なんだって……！」

アミルは立ち上がり、キールスの顔を覗き込む。キールスは口元を固く結んで顔をそむけた。

「隊長、どういうことですか！？」

アミルはキールスの胸元を掴んで叫んだ。

「金髪に青い目のクロエという女だ。アミル、知っているか？」

副隊長は低い声を響かせ、隊長を睨んだ。

「知りません。名前も、初めて聞きました」

「そうか」

「クロエは違法な布教活動の首謀者だ。ギリシア人居住区外で、ペルシア人を国教からキリスト教に改宗させている。キリスト教徒は増やしてはならない。隣の敵国、大ローマ帝国のキリスト教徒と結びつかれては面倒だからな。宗教になびけば政治に共感しかねない」

副隊長はキールスに詰め寄ると、拳を振り上げ、殴りつけた。

「大したことをしてくれたものだ」

副隊長は、牢に入れて見張っておくように、とアミルに言いつけた。そして兵士と共に、倒れたキールスを跨ぐと尋問室を出て行った。

「隊長……一体どうしたって言うんですか」
背中に手を回して抱き起こす。

「自分でもわからん。ただ、逃してしまった」
呟くように言うと、目を伏せて笑った。

アミルは言いつけ通り、留置所の牢にキールスを入れると、鍵を掛けた。新しい蠟燭を取りに外に出ると、副隊長と数人の兵士と出くわした。「あの女」————クロエを搜索しに行く、と副隊長は言った。表向きは脱走になっている。どのみち、王宮軍の手落ちに変わりはないが、と口元を歪めた。

昼間でも薄暗い留置所の中で、蠟燭に火を灯した。周囲がふっと明るくなる。

壁一枚隔てた通路からは、時折、人の足音が聞こえる。通路を挟んで反対の牢には、ギリシア人たちが幽閉されていた。尋問の順番が進むたび、牢から出る者と戻って来る者が、兵士に連れられて歩いていた。

「確か、全員で十人でしたよね。隊長」

「あの女」を除けば————。

「ああ」

「出入りが頻繁です。各人に同じ質問をして、辻褄を取る方向ですかね」

「そうだな」

キールスの声は力なく、憔悴し切っていた。

「……こんなあなたを初めて見ました」

「俺もこんな風になったの、初めてだ」

アミルは通路に人気がないことを確認すると、キールスに聞いた。

「クロエって、誰なんですか？」

「誰かは知らない。首謀者であること以外」

「なぜ、わざわざ首謀者を……。今回の首謀者は、見せしめに極刑だ、と自分で言っていたじゃないですか。なぜ逃したりしたんですか？」

？」

その時、入り口に人の気配がした。アミルは後ろを振り返ると、愕然とした。そこには金の髪を腰まで伸ばした、青い瞳の女が立っていた。白く柔らかい布をたわませて身に纏う、ギリシアの神殿の神々と同じ衣服。

「お…お前は……」

女はアミルがとっさに腕を掴んだのをもとめせず、そのままアミルを引きずるようにして、歩を進めた。

「こんなことだろうと思った。あんた、嘘つきね。ペルシア人ってこんなに嘘つきなの？どこが大丈夫よ。なにが心配いらない、よ」キールスは後ろ手に縛られた体を左右に揺らして立ち上がると、格子の間に言う。

「クロエ……どうして戻ってきた」

「さあね」

「お願いだから、逃げてくれ。俺は君に刑罰は与えられない」

「もう遅いわよ」

女は背も年齢もキールスと同じくらい上だった。軍服を着たアミルを青い目で見下ろす。

「ちよっと、あんた」

「は……」

「私を牢に入れて。この人を外に出してよ」

まるで命令のような強い口調。アミルはあ然として声も出ない。

「キールス。あなたに何かあったら、私はもう生きていたくない」クロエは牢の格子を掴むと肩を落とし、今度は声を震わせた。

「実に理解しがたいことだよ、キールス君」

副隊長は牢の中でクロエと並ぶ隊長に向かって言った。

「二度手間で出動して、帰って見たら獲物が自分で牢に収まっているとわね」

副隊長は牢の鍵を開けると、先にキールスを出し、アミルにクロ

エを見張っておくよう命じた。そして二人の審判は、今日中に王が下す、と言い残した。

どこか直線的な目鼻立ち。でも、角の滑らかな肌。ギリシア人の顔は、血の通った石像のようだ。金色の髪の間から、濃い青の瞳と薄桃色の頬がのぞく。

「あんた……居住区からここに来るとき、隊長と馬に乗っていた人だね」

捕らえたギリシア人が馬車に乗り切らず、女を一人外に出した。仕方なく、隊長が一緒に馬に乗せた。捕らえたギリシア人には男も女もいたが、思えばあの女は、クロエだった。

クロエは答えなかった。

逃げないように、と背中を抱くように手綱を握っていた、背の高い軍人。触るな、と噛み付くように言うのと、暴れるな、落ちるぞ、と言われた。一枚の葉のように整った目の青年。凜々しくて、穏やかな声だった。

「キールスから、尋問を受けたらもう居住区外での布教はしないと申し出ろ、と言われたわ。そうすれば刑が軽くなる、と」

変な軍人だ、と思った。罪人の刑罰を心配する軍人なんて会ったことがなかった。

「神のために戦うな、それは軍人に任せておけ、って言われたわ」隊長らしい、と思いつながら、アミルはクロエに耳を傾けた。

「人は安心できる場所で神に祈れるのが、一番幸せなんだと……。苦しみを抱えると、逃れたくて手を合わせるようになる。幸せだと感謝して手を合わせるようになる。どちらがいい、と聞かれたわ」

馬はゆっくりと背を揺らして歩いた。自分を捕らえた軍人と馬に乗るのは屈辱的だった。でも、気がつく、その軍人の胸に寄り掛かっていた。独り言のように、疲れた、と漏らすと、それでいい、と背中に声が響いた。

いつの間にかそのまま眠っていた。陽が西日に傾く頃に司令部庁

舎に着くと、粗末な留置所に連れて来られた。男は馬車から囚人を降ろす兵士たちより先に、留置所の牢の鍵を開けた。薄暗くて土臭い部屋だった。

「居心地は悪いが、他の仲間と一緒にだ。灯りも食料も、ある程度持つてくる。ここで、しばらく大人しくしていてくれ」

「……軍人さん、あなた、名前は？」

「キールス。お前は」

「クロエ」

キールスが牢の扉を閉めると、思わず彼の名を呼んだ。彼は黙って顔を向けたが、目はそらしていた。入り口の向こうに、複数の足音が聞こえた。残りのギリシア人たちが、兵士たちと一緒に向かってくるのが分かった。その途端、キールスは牢の扉を開けて、中に身を滑らせた。そして、どちらともなく、唇を重ねた。

「……あんた、隊長に惚れたろ」

アミルは青い目を覗き込むように言う。

「そうね。神様よりもね」

ふふ、と笑っておいて、クロエは下を向く。

「自分が首謀者だ、と打ち明けたわ。彼の顔色がみるみる青くなっていた」

深夜、蠟の灯りが全て消えると、格子の向こうに動く人影があった。寝静まった仲間を起こそうと声を上げた途端、シッ、と人影が言う。潜めた声で、俺だ、キールスだ、と。

牢の扉を静かに開ける。鍵を閉めた彼の手が自分の手を引いて、外に出た。満月を少し欠いた月の光が、煌々と明るかった。

庁舎のすぐ隣にある厩舎に向かうと、キールスは二頭の馬に轡と鞍を付けた。

「馬には乗れるな。君の雰囲気からして」

「まあ、乗れるけど……」

「大道道……『王の道』に沿って西に向かえば、ローマ帝国に入る。居住区には戻るな。どうせまた追っ手が来る。ローマ帝国の教会で

匿ってもらうか、そのまま下ってギリシアに行け。祖先に縁の土地なら、君を受け入れてくれるだろう」

「こんなことをして、あなたはどうなるの？」

キールスは薄暗闇の中でそっとクロエを引き寄せた。さっきよりも強く、唇が触れた。

「……俺の目に狂いはなかったな。それ、ありがとうございます、と乗っておくものだ。……君はそうはできない」

指を折り曲げた彼の手の甲が、頬に触れた。

「君がなぜ首謀者になれたのか、分かる気がする。なぜ忠実なペルシアの民が、君の布教になびいてしまったのかも」

奥に強さを秘めた、まっすぐな目。信念に燃えても、敵意はない従順さ。

「俺のことなら心配するな。それでも王に目を掛けてもらっている軍人だ。上手くいけば、隠蔽するさ」

最後の一言は、取って付けたようだった。

月を頼りに、夜道に馬を並べる。蒼い光の上に伸びる影。遠くに、一際幅の広い道が見える。ところどころに小屋が建ち、夜だというのに灯りも点いている。歩く人、荷物を積んだ馬車が静かに通り過ぎる。ペルシア帝国の東西を渡る大街道「王の道」だった。

「キールス、私……怖い」

「心配するな。国境までそう遠くはない。馬の足で、陽が登るまでには超えられる」

「違う」

青い瞳をまっすぐ向ける。

「自分の運命に、あなたを巻き込んだことが」

「……運命は、神様がお決めになるさ。少なくとも、君にはいい運命が待ってるさ」

そう言うと、キールスは躊躇うことなく馬首を返した。振り返って肩越しに言う。

「クロエ。元気で」

「一緒に、行けないの？私と……」

「ペルシア人の顔で、軍服を着て？」

西の敵国、ローマ帝国に入れるのは、一部の商人や外交筋の人間だけだ。人種も宗教も違うペルシア人は、受け入れられない。ましてや、軍人となれば死に行くようなものだ。

キールスは前肢を進めようとした馬の手綱を引いて、一度止める。「信じる神様が違うっただけで、苦しめて悪かった。こっちの方こそ、許してくれ」

強く、静かな声だった。

「王の政策が変われば国の神も変わり、国境を越えればまた神が変わり、人種が違えばまた信じる神が変わる。それゆえ人が争うのはばかばかしいことだ」

十年にも満たない昔、ササン朝はマニ教を信奉していた。王の政策が変わると、その思想に近い教理を持った拝火教が国教となった。火を祭り、火を崇め————神も祈りも変わった。

「時々、何のために戦っているのか、何を信じているのか分からないくなる」

宵闇の中でも、キールスの辛そうな顔が分かった。心の内をようやく言えた、という風にも見えた。

「異教の弾圧ももうたくさんだ。何かを信じている人から、それを取り上げるのは辛い」

「キールス……」

その時、クロエの心はもう決まっていた。この人と離れたくない。離れちゃいけない。そう思った。

「居住区で君を見たとき、強そうな女だな、と思ったよ。兵士に喰ってかかってたしね。でも君はあの時、一度教会から逃げたのに、一人で戻ってきた。捕まった仲間を庇って。他に逃げた連中は戻ってこなかった」

————なんて知ってるの

確かに、キールスの言う通りだった。しかし、逃げる活動家に無実の住民、騒ぎ立てる野次馬が入り混じり騒然としていた中で、よくそこまで見ていたものだ。

「僕はこの地位になるまでに、仲間を見捨てたこともある。そうせざるを得なかった、と言いついて聞かせて。なのに、今でも悔やんでる」
また会えるように祈るよ。そう言つて、キールスは馬を走らせた。一度止まって、手を振った。その姿は、もう影となり闇に溶けていた。

どのくらい時間が経つただろう。街道を遠目に見ながら、馬は未だ一步もその場所から動いていなかった。ローマ帝国に逃げ込めば、もう安心だ。ただ、二度と会えないかもしれない。青い軍服に身を包んだ、あの青年に。

夜の闇が白く染まり始める。クロエは馬の鼻先を変えると、来た道を引き返した。

「人の運命は、神様が与えるものだと思っていた。神の定めた運命を、人は生きるのだと」

牢の中で、ずっと視線を落として口をつぐんでいたクロエが、顔を上げた。

「でも、私はキールスの元に戻ると決めたとき、初めて自分で運命を選んだ気がした」

「……お二人の間にどんなことがあったかよく分かんないけど」
クロエの前であぐらを崩し、アミルは小さく笑った。自分でも不思議な気分だった。

「俺、なんだかうらやましいや」
罪を犯した二人なのに。そう心の中で呟いた。

玉座に座った王は威厳のある深い皺と長い髭を蓄え、肘掛に頬杖を付きながら、ひざまずくクロエに視線を向けた。

「……さて、クロエと言ったな。女的首謀者とは珍しい。このササ

ン朝ペルシアでは外国人居住区内で宗教の自由を認めているが、居住区外での布教活動は重犯だ。知っていたな」

「はい」

王は髭を撫でると、ふふ、と小声で笑った。

「それをなぜ、と聞くのはよそう。禁じられていても手を出す、それは人間の性だからな。だから神に祈る。愚かだからこそ。違うかな」

「おっしゃる通りでございます。王」

クロエは頭を垂れた。

「さて、お前がどういう人間で何を思っているかは……キールスが山ほど話しおった。お前の命乞いをしながらな」

王は目を細めた。今度は笑わなかった。

「あれは十五で王宮軍に入隊以来、この五年間実に忠実に戦績を上げてきた。そのキールスが、初めて国威に刃向かう行為をした。お前も一度助けられた命を反古にする覚悟で戻るとはな」

そして王は声を上げて笑うと、言った。

「世は強い人間が好きだ。どうだ、後宮に入れ、娘」

王の間に控えていた廷臣、神官、軍人たちが一様にざわめいた。

「以上だ。判官」

王はそう言うと、玉座を降りた。

「よう、兄貴」

額から頭部を覆う箱型の帽子に、一枚布のような貫頭着。耳の後ろに掛けた紐を外し、目から下の顔を隠す四角い布を剥ぐと、妖艶な笑みを浮かべる。白一色で統一された、拝火教の神官の装束。最年少にして大神官のアリだった。

「アリか。元気そうだな」

「窮屈そうな独房だな。三週間の辛抱ですぞ」
格子を掴んでしゃがみこむ。

「あのクロエっていう女、兄貴が命懸けで惚れ込んだ女だけにね、

王にも気に入られるとは。あっぱれだよ」

キールスは弟の勢いに、ため息をつく。

「いつも俺が言うことだけど……兄貴、考えすぎるな。これでよかったんだ。どんなことでも執着しすぎると、身を滅ぼす」

クロエは利口だ、とアリは言った。

「後宮に入ったって、通用口くらいは通れるさ。なんなら、俺が手引きしたっていい。上手く口実を作るさ。王の妃だって、愛する女に変わりはない……だろ？」

キールスは頭を抱える。

「……これ以上王にご迷惑を掛けるわけにはいかない。仮にも、王宮軍の身でありながら」

アリは母親似の瞳を横に流して言う。

「俺は兄貴のそういうところ嫌いだな。一本気もいいけど、なにかを犠牲にするなんてばかばかしいぜ。俺は生まれてこの方ずっと神官だ。八歳までマニ教の司祭の師弟だったとしても、国王が拝火教を選べばその法衣を着るまでだ。王がキリスト教徒になれば神父になるし、仏教徒になれば袈裟を着るさ」

神官の布帛を顔に戻す。顔の半分を覆う、四角い布。

「人間の心なんて、自由なもんさ」

艶やかな目元を、にっと細めた。

「誰が誰を愛してるかなんて、目で見てすぐ分かるもんだぜ」

アリは、ふふ、と声を漏らして笑った。

三週間はあっという間に過ぎていった。その間に、捕らえられたギリシア人活動家たちは居住区外での布教廃止の誓約書を書かされ、ある者は鞭で打たれ、ある者は禁固刑となり、またある者は無傷で居住区に戻っていった。ただ一人、クロエを後宮に残して。

副隊長が牢の鍵を開ける。その後ろでアミルが見守るように笑顔に向けた。キールスは久しぶりに外の澄んだ空気を吸うと、思い切り背伸びをする。副隊長は何も言わずに身を翻すと、その場を去っ

て行った。

「隊長」

久しぶりに、そう呼ばれて、気が締まる。

「……来週、クロエの婚儀が行われることになりました」

伝えるべきではないかも知れませんが、と言うアミルの背中を、キールスが叩く。

「ああ。そうだな」

「クロエは……どう思ってるんでしょうね」

————花嫁姿なんて見られたくない。私が愛してるのは、あなただから。

監視をくぐり、闇夜をくぐり、何度も牢の前にやって来た。時には涙を浮かべながら。

「これが運命なら仕方ない。従うさ」

運命、という言葉にアミルはクロエの言葉を思い出す。

「隊長……クロエは言っていました。隊長のもとに引き返したとき、初めて、自分で運命を選んだ気がしたって。運命は神が与えるものではなく」

キールスの胸の中が、ざわめいた。

「神様よりも、隊長に惚れた、とも」

下から見上げて、目で笑う。試すような顔。

「どんな返事をご期待かな」

キールスはアミルの頭にばふっと掌を乗せた。ふざけたように。

回廊を渡る。愛する人への想いを絶つために————。

ここから本殿に入れば、王の間で婚儀の祝宴が行われている。龍涎りゅうげ香んこうの香り、ペルシアの豎琴、モスルの平鼓タンバリン。絨毯の上で酌み交わされる金銀の杯の間を縫って、最前列の席に向かう。錦の掛かる高座には、新郎の王と、うつむいた花嫁。後ろには大臣と、祝詞を読み終えた大神官、アリの姿があった。王はキールスに、玉座の前へ来

るように促した。キールスは片膝を立て、もう片膝を折り、右手を胸に当てる。

「この度は、おめでとうございます」

煌びやかな衣装を纏った王が、花嫁に目をやる。青い瞳は伏せられたままだった。

「これからも王宮軍の忠実な兵士として、王に、そして妃に仕えてくれるな」

「はい」

近くで見ていたアリの額に、冷や汗が浮かび上がる。アミルも身を乗り出して、様子を伺った。

「あ……馬鹿……！」

思わずア리가声を漏らす。アミルはついに席を立った。

「ほう」

王は髭を撫で、一度大きく瞬きをした。

「お前が、泣くとはな」

キールスは目元を袖口で拭うと、目を閉じて姿勢を正した。

「戻れ」

キールスは額の前で手を合わせ、立ち上がると席に戻った。目を閉じていた花嫁が、絹の垂衣を被った頭をもたげて、愛する男に目を向けた。その目から、涙が一筋零れ落ちた。

「見ちゃいられねえ……」

アリは堪らず顔をそむけた。賑やかに祝杯を挙げていた人々が、顔色を変えた。

王は玉座を立つと、楽師の演奏を止めた。

それから、異教徒の女と通じたとして、王宮軍の隊長が処刑された、と人々は聞いた。同時に、その女も同じ刑に処された、と。

「兄の死亡証明書を作るはめになるとはね」

王宮の片隅。神である火を焚く大火鉢が置かれた神官室で、アリは流れるような書体の文字を綴る。

「君のは、居住区の教会に送っておくからね、クロエ」

ええ、と返事をする。着慣れたギリシアの衣服を纏い、ぴったりとキールスに寄り添う。

「これは、お前が持っていてくれ。いつか、着られるように」

キールスは隊長の階級の刺繍が入った青い軍服を折りたたんで、アミルに渡す。

「二人とも、よかったな。王の御心の賜物だ。火の神に感謝だ」

アリは死亡証明書を部下の神官に渡した。

「さあ、もうどこに行っても敵だらけだぜ。兄貴を連れてローマ帝国には行けない。東のクシャンは仏教の敵対国。二人とも入れない。どこでどう生き延びるか……それが一番の楽しみだ、と王が言っていたよ」

キールスとクロエは互いを見て笑う。同じような笑い方で。そんな二人を見て、もう手の届かないところに行ってしまうんだな、とアミルは今更ながら思う。

キールスはアリの次に、アミルを抱き締める。クロエもアリとアミルの頬に、軽くキスをする。

「今度はいつ会えるか分からないけど、でもいつかまた会おう」それが、最後のキールスの言葉だった。

外は十四夜の月だった。馬の歩く道を、蒼い光が煌々と照らす。あの夜とよく似ていた。

「キールス、どこの土地でも私は平気」

受け入れてもらえるかは分からない。でも、あなたの隣にいられば、そこが、私の安息の地。

クロエの青い瞳を見つめて、キールスは静かに頷いた。二頭の馬が並ぶと、キールスはクロエを引き寄せて、そっと唇を落とした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0073k/>

宵の蜜月

2010年10月8日15時23分発行